

東京における“イースト・ロンドン”*

高野 岩三郎 [山本 潔訳・解題]

目 次

緒 論

§ 1. イースト・ロンドン短描

§ 2. 東京における三つの典型的貧困地域

a. 下谷の万年町 b. 四谷の鮫ヶ橋 c. 芝の新網町

§ 3. 貧民の状態についての諸資料

a. 区役所の書類により作成した諸統計表 b. 学校長・貧民住居管理人との個人的会話 c. 高野の個人的観察記録 d. 「帝国済民会」原氏提供資料

§ 4. 「帝国済民会」の史的概要

貧民の状態

はじめに

§ 1. 地域の全般的考察

§ 2. 住民の5階層への分類——以下の報告の範囲

§ 3. 必需品の状態

a. 衣服と寝具 b. 食料（魚・野菜）、明り・燃料 c. 住居（家賃・構造等） d. 健康・病気 e. 窮民の日々の支出

§ 4. 仕事

a. 仕事の種類 b. 労働の時間 c. 収入

*a. 原論文（英文）は、高野岩三郎“East London in Tokyo” 1894、である。これは、帝国大学法科大学政治学科第二学年生高野岩三郎が、学友の落合謙太郎と共同で行なった調査の報告である。報告原稿は高野岩三郎によって執筆され、明治27年4月下旬の「演習会合」における報告も高野が行なっている。この報告の原稿（手書き？）は、のちに高野岩三郎「統計学を専攻とするまで」（藤本博士還暦祝賀論文集刊行会編『藤本博士還暦祝賀論文集』1944年、日本評論社）および高野岩三郎著『かっぱの尻——遺稿集』（鈴木鴻一郎編、1956年、法政大学出版局）に収録されている。今回の山本の翻訳は、当初、『かっぱの尻』所収論文によってなされたが、本誌編集委員会榎一江准教授・松尾純子研究員の御協力をえて『藤本博士還暦祝賀論文集』所収論文を参照し、若干の誤植訂正をおこない、また『論文集』記載語句を本文の（（ ））内に追加した。

b. ①英文原文「目次」細項目〔上掲a.b.c.…〕を訳文本文の“小見出し”とし、〔 〕内に加えた。②訳文中の（ ）内は原文。訳文中の〔 〕内は訳者の記入。

§ 5. 心的状況

a. 貧民の温和な性質 b. 異常な希望 c. 迷信 d. 子供の教育 e. 犯罪

§ 6. 貧困の原因

§ 7. 結言

緒 論

§ 1. イースト・ロンドン短描

ロンドンという都市の名が語られるのを聞いたとき、私達はただちに、繁華な商業・繁栄する工業・美しい街路・壮麗な邸宅等を、思い浮かべます。これはロンドンの晴れやかな側面です。しかし、逆に、暗い面も存在しています。暗いばかりではなく、最暗黒の側面も存在しています。

イースト・ロンドンは、“イースト・ロンドン”と云う言葉が貧困と墮落の巢と置き換えられるほどにまで、貧乏・窮乏・極貧 [destitution]・罪惡に満ちています。このような状況に、心を動かされた多くの人々のなかで、チャールス・ブース (Charles Booth) は一戸一戸についての調査を行ないました。そして3年間 (1886-1888) の調査研究の後に、その調査結果は彼の大部の著作『人々の労働と生活：第1巻イースト・ロンドン』 (“Labour and Life of the People. Vol. I. East London”) として刊行され、研究者や実務家に価値ある資料を提供しました。彼の推算によれば、この地域には約90万人の住民が包含されており、その三分の一以上 (35.7%) が貧窮の深みの中にあります。

ウィリアム・ブース (William Booth, 上記のCharles Boothとは全くの別人) は、このような地獄から、彼等を救い出さんと決心し、熱意と堅い決意をもって立ち上り、救世軍 (Salvation Army) を組織しました。そして、現在その巨大な社会計画を展開しつつあります (詳細については、彼の “In Darkest England and Way Out” [『最暗黒のイングランドと脱出の道』] を参照されたい)。この他、物質的にも・精神的にも貧困を救済するための、トインビー・ホール、オックスフォード・ハウス、DR. バーナード・ハウムズ、ホスピタルズ等々、多くの機関があります。

以上、“イースト・ロンドン”について [の短描]。

§ 2. 東京における三つの典型的貧困地域

わが国の、この都市 [東京] に目を転じますと、一つの“大イースト・ロンドン”は存在しませんが、ここには沢山の“小イースト・ロンドン”が、殆どあらゆる地域に散らばっています。その中でも、下谷地域の「下谷 まんねんちょう 万年町」と「山伏町」、四谷地域の「四谷 さめがはし 鮫ヶ橋」、芝地域の「芝 しんあみちょう 新網町」が、最も知られており、かつ大規模な貧困地域 [貧民窟] です。そこで、これらの三つの地域を典型と捉えて、観察の範囲をそこに限定し、その状態について述べることに致します。

§ 3. 貧民の状態についての諸資料

貧乏な人々の状態について語り始めるのに先立って、以後の説明の典拠について、若干触れておきます。

[a. 区役所の書類により作成した諸統計表]

まず第1に、私は、これら地域の貧民に関する統計をえたいと思いました。そこで落合 [謙太郎] 君と私 [高野岩三郎] は、四ツ谷区役所を訪れました。しかしながら、鮫ヶ橋の貧民に関する特別の統計はありませんでした。そこで私達は、鮫ヶ橋全体を貧困地域と考えて、自分で統計表を作成しなければなりません。他の方法が可能とは考えられませんでしたし、また、このような仮定が、実際に非合理的とは思われなかったからです。そこで私達は区役所を5回訪れて、「戸籍簿」(the Register) と他の公文書 (official documents) から、諸統計表 (a. 住居戸数・人口及びその増減, b. (出生及び死亡数, c. 死亡者の年令と病名, d.)) 判決が出された犯罪の数と犯罪の種類) を、作成しました。

この統計表の作成作業は、芝と下谷の区役所においても、全く同じやり方で行なわれました。芝 ((地区については、落合氏が収集された資料を利用させていただきました。下谷)) 区役所についていえば、私一人で役所を2度訪問しています。これらの資料は、私の報告 (paper) の第1次資料をなすものです。これら資料について、過度に重きを置くことは避けませんが、これらの資料によっても、これら地域における全般的な特徴と傾向とが確かめられると考えています。

[b. 学校長・貧民住居管理人との個人的会話]

第2に、貧民と直接的に接触している人々から、貧民の実際の状態について聞くことが、私達にとって必要不可欠でした。そこで、私達はまた、江口辰五郎氏 (鮫ヶ橋の230人の貧民居居の管理人) と浅野直八氏 (鮫ヶ橋のクリスチャン・チャリティ・スクール主事) と鈴木熊次郎氏 (新網町の141人の貧民居居の管理人) とを、訪問しました。私達は、彼等と友好的に会話し、その説明の要点を記録しました。これらは、私の第2のデータ・ソースです。そして残念ながら、私達は、時間の不足のために、他の人々を訪問することは出来ませんでした。

[c. 高野の個人的観察記録]

第3に、個人的観察は、貧民の状態に関する諸事実を確かめるために、最も重要な方法でありましょう。しかしながら、それは同時に非常に困難であり、また多くの時間を必要とすることでもあります。私は各地域について2度、簡単な観察を行なったに過ぎません。したがって、私のなしえた観察は、極めて不十分であります。

[d. 「帝国済民会」原氏提供資料]

しかし、この点に関しては、新設の貧民救済組織の組織者である原十目吉氏から、多くの助力と価値ある情報をうることができました。原氏から提供された資料類は、この報告の主要部分をなしておりますので、原氏と氏の会について、若干述べさせていただきます。

§ 4. 「帝国済民会」の史的概要

原十目吉氏 (青森県出身) は、困窮者救済の熱意につき動かされて、「帝国済民会」(the Poor Relief Society) を、昨1893年1月、青森県八戸はちのへに設立しました。そして、他の数人のメンバーと共に、同年2月郷里を離れ、彼の旅程にあった100以上の貧しい家々を訪れ、1,000人以上の会員を得つつ、6月に東京に到着しました。それから、彼は個人的に調査活動に従事し、貧民が住んでいる殆どあらゆる地域の500戸以上の家々を訪問しました。彼は貧しい人々を訪問するのに、冬の

季節を選びました。寒さと飢えが、貧者に最も厳しく襲いかかる時期だからです。また大抵は夕方に、彼等の住居を訪問しました。その理由は、仕事の妨げにならないようにすることと、彼等の家庭事情に関する詳細な観察に、好都合であったからです。彼は人々に、家族・仕事・生活状況・関連事項・貧窮の原因等、多くのことを質問しました。そして彼は、事前に用意した印刷された様式によって記録しました。それから彼は、ケースごとに適当な救済策を示しました。彼は今、彼の記録の収集と編集に当たっています。そして彼の救済計画を実行に移すことに、努めています。

以上に示しました諸資料によって、課題の主な特徴について、報告を進めさせていただきます。

貧民の状態

はじめに

ここで、貧窮地域の一般的様相を、お示し致します。前にもお話致しましたように、私が扱った範囲は、三つの地域に限られております。しかし、私の調査から明らかになった多くのことは、東京の殆ど全ての貧民について、一般化しうることであります。もちろん、原氏〔「帝国済民会」原十目吉氏〕の説明が完全で究めつくされたものであると、私は申しませんし、また原氏自身もそのことを自認されております。私の報告には、多くの欠落と事実誤認があるかも知れません。しかしながら、この点を厳しくは批判なさらないと思い、弁解の言葉を重ねることはさげさせていただきます。〔以下〕、資料 (my sources) から導き出される諸事実 (the facts) のみを御報告致します。

§ 1. 地域の全般的考察

これらの地域における戸数と住民の数は、下の〔表の〕通りであります。

表 東京の三大貧困地域における戸数と人口

場所	戸数・人口	戸数	人口		
			男	女	小計
[下谷] 万年町と山伏町 (明治26年)		1,281	3,234	2,818	6,052
[四ッ谷] 鮫ヶ橋・谷町 (明治25年)		1,079	1,345	1,184	2,529
[芝] 新網町 (明治22年)		—	1,950	1,462	3,412
合計 [概数]		3,000戸以上	10,000人以上		

これ等の戸数と住民の数は、増加しつつあります。この貧民の増加傾向は、東京において一般的にみられますが、そのことは国の補助を受ける者の通増によっても、明らかなどころです⁽¹⁾。

(1) ①1871,M4/8/28の「太政官布告」後、政府は老幼疾病不具者等のために「養育院」を設けて、無告の民を收容することにしていた。②また、この報告当時 (1894, M27/4) の国家の救済 (relief of the state) あるいは救済法規 (Relief Regulation) とは、「恤救規則」(1874, M7/12) で、それは“老癯者・病気で労働できない者・13歳以下の幼児などで扶助をうけられない窮民に一定料の米を給付する”ことを、定めるに止まった。③またさらに1899 (M32) 年の「行路病人及行路死亡人取扱法」も、この種の人々を「救護のために收容」するに止まっていた。(大河内・吾妻編『労働事典』<1965, 青林書房新社>の、吾妻光俊・江口英一執筆担当部分<pp.75, 76, 637, 641>による)。

§ 2. 住民の5階層への分類——以下の報告の範囲

上記の住民は、五つの階層（classes）に区分できます。

[a. 安楽者（The Comfortable）]。この階層には、通常の労働者・上層職人・小売店主・雇人使用者（servant keepers）等、貧乏線より上の状態にある全ての人を含みます。

[b. 貧困者（The Poor）]。ここでの貧困者とは、その資力が自立した生活をからくも維持するのに十分な程度ではあり、手から口への生存を維持している人々です。この階層は、現状では、他からの援助を必要としていません。しかしながら、病気や他の災難がふりかかってくるならば、ただちに、「極貧」階層へと転落してしまいます。

[c. 極貧者（The Very Poor）]。極貧者と云うのは、その収入が彼等の生活を維持するのに十分ではなく、常に窮乏に脅かされている人達です。このクラスは、さらに二つに区分されます。①現行の救済法規（Relief Regulation）〔46頁の脚注参照〕により国によって支えられるべき者、即ち老人・片端・孤児等の力なき寄る辺なき貧民、②国家扶助のもとに置かるべきではないとはいえ、なお、生存のためには何らかの支援を必要とする者。

[d. 怠け者・浮浪者・乞食・半犯罪者（Loafers, casuals, beggars and semi-criminals）]。

[e. 犯罪者（Criminals）]。

貧困地域には、これらの諸階層（classes）の者が住んでいます。しかしながら私には、彼等諸階層の数量的な比率を定めることは出来ません、望まれるところではあるのですが。とはいえ、貧困者（The Poor）と極貧者（The Very Poor）の二階層が、大きな部分を占めていると確言出来ます。

これは、表面的な観察によってもわかる明白な事実です。原氏〔帝国済民会〕が、個人的に調査した500戸には、殆ど全て、この二階層の人々が住んでいました。以下の私の報告も、殆どが、この二階層の人々に関するものです。

§ 3. 必需品の状態

食料・衣服・住居は、生活の三つの必需品であり、もちろん貧乏な者も、富める者と全く同様に、これらを望んでいます。しかし貧乏な者は、これら必需品をкаろうじて手にいれるために、もがいているのです。以下、貧乏な人々が如何にしてこれら必需品を満たしているのかを見ましょう。

[a. 衣服と寝具] 貧民の衣服については、それが体をやと覆っているにすぎない、と云えば充分でありましょう。たとえ汚れたぼろ布であっても、衣服というものを持っている者は、比較的幸せな者です。外に出る時に、身にまとうぼろ布も持っていない者もいますし、膝までしか無い衣服で寒さから身を守っている者もいます。

彼等の疲れた体を横たえる寝床（beds）をもっている者は、幸せです。たとえ、それが古布の寄せ集めで薄く軽く汚れていて、寒くとも！ 家族全員が一つのどてら（one night clothes）で過ごすケースも、多く見られます。昼間の労働で疲れきっているのだから、眠ることは到底できない状態です。極端な場合には、藁筵わらむしろにくるまって（within straw-mats）寝る者もいますし、炭団火たどんびによる僅かな温もりで寝る者もいます。

より貧しい地域には、貸蒲団屋の出店があります。しかしその殆どは、貧しい人々に蒲団を貸しません。貧民が蒲団を質に入れるか売り払ってしまう事を、恐れるからです。

[b. 食料・明り・燃料] 貧民の食料は、富者の飼い犬や飼い猫よりも、はるかに劣ったものです。信じられないかも知れませんが、事実がそれを証明しています。カーライル (Carlyle) が、云ったように、“四つ脚の働き手は、この二つ手の人間が怒り求めている全ての物を、既に得ている”のです。[貧民の] 食料としては、劣等級の米が最上です。南京米と [大麦の] 挽割ひきわりは、まだ良い方です。薩摩芋の破片と米糠の混ざった薄粥が、最低のものです。

このほか、貧民は食べ残しの、御飯ごはん (残飯) や魚や野菜やお汁つゆ (soups) にも、食料を見出します。毎日、学校や兵營から得られるこれらの物を、安い価格で売っている店もあります。[四ッ谷] 鮫ヶ橋の貧民は、近くにこの種の店が六軒もあるので、最も多くこの種の食料の恩恵に浴しています。これらの価格は、通常、次の通りです。

残飯 (4杯) 1銭、焦飯おこげ (6杯) 1銭、野菜の残り等 (1人1食分) 1厘、残り汁2厘

その店の客が貧民である魚屋の店の前に並べられる魚は、鱈たらや塩鮭しおざけや干魚等ひざかなの下級魚です。また、魚の骨や頭や皮等も売っています。5厘や1銭を支払って、貧しい人々はそれを買って求め、彼等の食欲を満たしています。

野菜と野菜の漬物 (最低種の) とは、1厘か2厘で買うことができます。

一般的に云って、晴れた日には、貧しい人々のポケットは比較的に重たいので、魚がより多く買われますけれども、雨天の時には、反対に野菜屋が忙しいのです。

照明に関して云えば、人々は“カンテラ”と呼ばれるブリキ板で作られた容器を使い、それを5厘か1銭の油で満たします。夜業をする者以外、彼等は殆どが早く寝て、油代を節約します。細かな点までの心配りです。

彼等は掻き集めた落葉・木端 (Koppa 木葉) や5厘か1銭で買った薪によって、暖をとり料理をします。一言で云えば、我々にはつまらぬ物と見える物でも、彼等には価値ある物なのです。

[c. 住居] 彼等の住居は、大抵の場合、いわゆる「長屋」です。長く連なった一階のブロック・ハウスで、通常は12か13に区切られています。その各住居は、通路に面して9尺 [1.5間]、奥行きが12尺 (2間) です [6畳分]。それ等は、最も有り触れた材料で、最低の出来栄で造られており、そして現在では、年月と放置のために、殆ど朽ちています。曲がった屋根の棟・傾いた軒・破れた窓・つぎはぎだらけの壁・無天井・破れ畳・朽ちた流し等が、これら長屋の実態です。内部は全てが暗く陰鬱です。これは、少しも誇張ではありません。家の中にあるものと云えば、壊れたコップや土瓶や鉄瓶や他の廃物等、大抵の場合、その持ち主自身と同じように、役立たずの使い古した、みすばらしい物以外にはありません。

この地域では、土製の竈かまどを見ることは、極めてまれです。この地域では、出来合いの食べ物を、店で買うことができるので、竈は必要ではないからでもありますが。

家賃は、住居の広さ・位置・古さ等によって、大きく異なります。家賃は月に30銭から90銭です。そして殆どが日払いです (つまり毎日1銭から3銭です)。月払いのことは極めてまれです。長屋の管理人は、夕方に長屋に行き、家賃を集めます。家賃は、貧乏人の家計のなかで、負担となる項目です。それ故、仕事が旨くないと、管理人の厳しい催促を恐れながらも、家賃を払うことができません。私が訪れた管理人の言葉を信ずるならば、ごく少数の者のみが毎日規則的に家賃を払い、大部分は月に20回だけ支払い、極端な場合は月に7、8回しか支払わないと云います。

ワンセットの長屋には、住居とは別に作られた共同の便所 (water-closet) があり、その傍らには、ごみ溜めがあって、云い表せないような不快な臭 [odour] を発しています。しかも、その便所とごみ溜めの近くには、杵が壊れ水はけも良くない井戸があるのです。

[d. 健康・病気] 以上が、みすぼらしい服を着、ミゼラブルな寝具に寝、劣悪な住居に住み、埃だらけの空気に覆われて不衛生な、スラムの人々の食事・住居・衣服の状態です。そしてその結果は、彼等の病気に示されています。彼等が最も苦しむ病気が、皮膚・胃・肺・のど・目に関する病であることは、きわめて当然のことです。これらの健康上の欠陥にもかかわらず、((彼等は比較的丈夫です。これは多分二つの理由によります。第一には、彼等は毎日激しく働き、活発な動作でエネルギーを消費します。そして第二には、長年月のうちに、彼等は次第に、このような無理に慣れてしまうのです))。

[e. 窮民の日々の支出] このパラグラフを終える前に、極貧者は [1日] 1 銭 2, 3 厘で、その生存を支えることが出来る、((家賃を加えても生活費は 3 銭を越えない)) ということに、注意を喚起しなければなりません。その生命の、何と安価なことでしょうか！ しかし、かかる些細な金額を、その収入が越えない人々が、存在するのです。何と気の毒な人々ではありませんか！

§ 4. 仕事 (Employment)

[a. 仕事の種類] 貧しい人々がその生活を支えている仕事は、非常に多くまた変わった仕事なので、16種以上をあげることができます。その内、重要なものだけを示しますと、人力車夫・荷車挽・日雇・ぼろ拾い (紙屑拾い)・下駄直し・煙草キセル直し・ガラス破片買・マッチ箱貼り等が、貧民街における主な仕事です。これらの人々の中には、みみずやぼうふらをとったり、赤蛙を掴まえるために凍った土を掘ったり、公衆便所壺の中の落し物を集めたりしている人も居ます。

[b. 労働の時間] 殆どの貧しい労働者は、朝早くから夕方まで働きます。私は、ある婦人から、午前 5 時か 6 時から、小休止のみで午後 12 時過ぎまで、働くを聴きました。

[c. 収入] (wages) 彼等が仕事の報酬 (remuneration) として受取る収入は、もちろん仕事によって異なります。しかし、一般的に云って、彼等の得る収入は、[1日] 3 銭以上・10 銭以下です。人力車夫の収入が一番多いと云われています。しかしながら、彼等の収入が 1 日 10 銭を越えることは、めったにありません。彼等は通常年寄りで体が弱く、半ば壊れた人力車で、夜間に働くからです。このようにして得られた金は、ただちに家賃や食料や灯油代として支払い尽くされてしまい、家についた時には、何も残されていません。たしかに、日稼ぎ労働者の中には、一日に 17 ないし 20 銭稼ぐ者もいます。しかしながら、この者達は、その金を、酒やその他の悪しき目的に使ってしまいます。貧しい労働者達は、晴れた日には幸運だと感じます。しかし雨が降った時には、屋外労働者達は仕事のない状態を強いられ、生計の手段は途絶え、飢えと困窮が彼等を押しつぶします。その時には、どうするのか？ 彼等の仕事着を質に入れるか、乏しい家財道具を売り払うほかないのです。実際、“三日の雨天は、長屋に飢えをもたらす” という格言は、現実を表しているのです。

§ 5. 心的状況

[a. 貧民の温和な性質] ここまでは、物質的状況について述べてきましたので、以下、心的状況の叙述に進みます。犯罪者と半犯罪者を除いて、貧困層に属する人々は皆、一般に穏やかで従順な性格をしています。彼等は十分な食料と衣服に欠けてはいますが、興奮的気質からは遠く、わずかな楽しみごと [delight] にも、殆ど関わりません。また他人を妬んだり冷笑したりもしません。そして日々穏やかに働いています。これは、もっと注目されるに値することだと思います。

[b. 異常な希望] 彼等は、通常は穏やかな性格なのですが、時には、異常な空想と希望にかられます。原 [十日吉] 氏が関係した貧乏な人々の中には、大惨禍と大変動の爆発を期待し歓迎している者も居るそうです。これは、一見奇妙に見えるかも知れませんが、彼等が大惨禍や大変動が起こるのを望むのは、全く当然のことです。というのは、大火事や天災や飢饉などは、確実に、貧しい人々にもっと収入の多い仕事を、もたらすだろうからです。彼等は彼等自身、大惨禍や社会的混乱を望むものではありません。しかし、彼等はそれ等によって、最大の希望である彼等の物質的な欲求を満たすことができるような特別の好都合を望んでいるのです。この事実によっても、彼等が精神的楽しみよりも物質的楽しみに、より大きなウエイトをかけており、ただそれを満たすために働いていることがわかります。

[c. 迷信] 貧しい人々が宗教心に富んでいると云うことは、多分誇張となるでしょう。しかし、彼等が迷信深いということは事実です。最も粗末な小屋にさえも、神仏のために「灯明」をともし場所 (fired place for gods) があります。そして毎朝・毎夕拝みます。そして、病気に苦しむ時には、時々半ば熟れた (neary rotten) 「御水」や「御符」を用い、回復のために祈ります。これは彼等が無学で迷信深い結果です。しかしもう一方で、部分的には、薬を買ったり医者にかかったりするには、多くの困難があるという事実のためでもあります。

[d. 子供の教育] 貧民の子供達は、殆どすべて、ほったらかしにされています。そして、学校へ行かされません。ここ [貧民窟] には、彼等を受け入れるべく予定された小学校が、殆ど或いは全くありません。“貧乏人は多くの子供を生みすぎる”と云われ、またそれは本当のように思われます。ある時、私は [下谷] 万年町で、30人以上の男と女の子供達が道路に集まって遊んで居るのを見ました。彼等の多くが、貧乏で無教育で適当な保護を受けていない・次世代の両親となるのです。

[e. 犯罪] ここで犯罪について、二三付け加えます。これらの地域に住んでいる人の犯した犯罪は窃盗で、それが総犯罪件数の半分以上を占めています。また多くの習慣的犯罪があります。これは、貧民救済政策を論ずる場合、考慮すべき事実であります。

§ 6. 貧困の原因

如何なる原因で、彼等は、このような惨めな状態に落ち込んだのでしょうか？

貧困の原因を、三つに別けてみましょう。

(a) 遺伝的原因。貧困は遺伝的原因によるものであって、当該の貧民自身の失敗によるものではない場合。

(b) 内的原因。このクラスには、彼等自身の怠惰・飲酒癖・儉約心欠如・浪費癖等の故に、貧困

に陥った者の全てを含めます。

(c) 外的原因。これには、貧困の原因が、災難・老齢・社会変動・病気・大家族等の、避け得ない外的環境によるものであった者の、全てを含めます。

原 [十目吉] 氏の調査によれば、最初の原因 [遺伝的原因] は最も少なく、第3の原因 [外的原因]、とりわけ、病気・多子・老齢が最も多い、とのこと。

§ 7. 結 言

以上が、調査された地域 [下谷の万年町・山伏町、四ッ谷の鮫ヶ橋、芝の新網町] における貧民の状態であります。悲惨な状況ではありますが、彼等の数は、未だそれ程巨大ではありません。そして、高くはないわが国の一般的生活水準を心にえがくならば、彼等の状態は、ヨーロッパとくにイギリスにおける状態と比較して、それほどまでには悲惨ではないように思われます。イギリスとくにロンドンにおける富める者と貧しき者との間のような、そのような驚くべき格差は、存在していないように、私には思われます。

我々の周辺の貧しい人々が、富める者に対して敵意を抱き、現存の社会秩序に対して不満を抱いていることを示す兆候はありません。一言にして云えば、わが国には、未だ貧困問題は存在しません。しかし、ヨーロッパの文明と産業システムが強力に流れ込んで来る時に、このような状況が長く続くと期待出来るでしょうか。“出来る”と云うことは困難でありましょう！ このような理由故に、現在は、貧民の状態についての詳細な科学的調査と、適切な“救貧政策”考慮のための、最も適した時期であると、私は考えるのであります。実際、イースト・ロンドンにあるトインビー・ホールのマネージャーのバーネット師 (Rev. Barnett) が述べたように、「“貧民と如何に処すべきか”について、日本は西欧に、範を垂れることが出来る」のであります。

[訳者解題]

はじめに

高野岩三郎先生の遺稿集『かっぱの尻』（1956年、法政大学出版局刊）の存在を、氏原正治郎先生に教えていただいて読んだのは、訳者が社会科学研究所の助手の頃であったと思う。そして、同書所収の調査報告“EAST LONDON IN TOKYO”（1894、明治27年春）の意義について考えてみなければならないと思いはじめたのは、労働調査論研究会編『戦後日本の労働調査』（1970/3、東京大学出版会）の編集委員会に参加していた頃のことと思う。

同書の編集に当たっては、第2次大戦後の社会科学研究所関連の諸労働調査に調査番号を付すこととなった。そして、敗戦（1945/8/15）後、ほどなく実施された諸調査の配列順序につき、議論された。①この時の有力な意見は、戦後の労働調査は、ヒューマニズムに基づく調査・フェビアン主義的調査からマルクス主義的調査へと展開した、とするものであった。②これに対して筆者の意見は、敗戦後において、そのような展開の順序はなく、戦時の思想統制下において禁圧されていた種々の自由主義的・社会主義的思想が、同時並行的に蘇ったのであり、社会調査の分野においても、各種の思想的・理論的立場の調査が、同時並行的に復活したと考えるべきである、というものであった。

そして、日本におけるフェビアン主義的立場からする社会調査の歴史を考える場合には、まずもって、第二次世界大戦前における社会調査の歴史をあとづけることが必要であると考えた。この場合、戦前における社会調査としては、高野岩三郎『月島調査』（1918）が、つとに知られている。しかしながら、高野岩三郎の実施した社会調査としては“EAST LONDON IN TOKYO”（1894、M27春）が、最初のものである。しかもこの報告の初めには、Charles Boothの“Labour and Life of the People. Vol. I. East London”に言及されてさえもいる。もっとも、この高野岩三郎の調査報告は、帝国大学法科大学政治学科学学生時代における「応用経済学『演習会合』報告」（英文報告原稿・手書き？ 演習担当はドイツ人Adolf von Wenckstern講師）として残されたものであった。この手稿は、のち前掲の『藤本博士還暦祝賀論文集』（1944年）に、ついで、1956年4月に至って、高野岩三郎著・鈴木鴻一郎編『かっぱの尻——遺稿集』（1956年、法政大学出版局）に収録されている。とは云え、これは、現在にいたるも一般には知られてはいないようである。しかしながら、この調査報告は、社会統計学者高野岩三郎の原点をなすものとして、記憶されるべきものと云えよう。

もっとも、高野岩三郎の人と学績については、上記『かっぱの尻——遺稿集』（1961年、法政大学出版局）、大島清著『高野岩三郎伝』（1968年、岩波書店）⁽¹⁾、大橋隆憲『日本の統計学』（1965年、法律文化社）等において、既に明らかにされているところである。したがって、以下の

(1) 本書は、大内兵衛・森戸辰男・久留間鮫造監修：大島清著『高野岩三郎伝』（1968年、岩波書店）となっており、高野岩三郎の「本伝」とも云うべきものである。また、巻末には、高野岩三郎先生の詳細な「年譜」「著作目録」と「主要参考文献」リストが掲載されている。

解題においては、このゼミナール報告“EAST LONDON IN TOKYO”（1894, M27春）の、日本における貧困調査史上の位置について、簡単に解説するに止めることとしたい。

貧困調査史上の位置

（1）貧民窟探訪記

明治初期から中期にかけて、ジャーナリストによる“貧民窟探訪”がすすめられ、中川清編『明治東京下層生活誌』（1994, 岩波文庫）にも、興味深い“貧民窟探訪記”類が収録されている。著者不詳「府下貧民の真況」（『朝野新聞』1886（M19）/3/24-30, 4/1-8）、著者不詳（『国民新聞』1890（M23）/6/15-20）、桜田文吾「貧天地饑寒窟探検記」（『日本』1890（M23）/8/29-24/1/5）等である。また、松原岩五郎『最暗黒の東京』（1892（M25）/11/9, 民友社、のち1988年、岩波文庫）も、優れた“貧民窟探訪記”である。しかしながら、この高野岩三郎のゼミナール報告原稿は、“EAST LONDON IN TOKYO”というテーマ自体に示される如く、国際比較という観点に立つ調査研究報告たる点において、ジャーナリストによる“貧民窟探訪記”とは次元を異にするものであった。

（2）貧困調査研究の原点

ついで、学術的な“貧困調査研究”という観点からすれば、まず挙げられるのは、呉文聡くれあやとし「東京府下貧民の状況」（『スタチスチック雑誌』1891（M24）/1/20, のち中川清編『明治東京下層生活誌』1994, 岩波文庫所収）であろう。呉文聡（1851-1918）は、杉亭二の「甲斐国現在人別調」（1879, M12）実施にも関与している日本における近代社会統計学の草分けの一人である⁽²⁾。しかしながら、この呉の論文は、自らの調査結果報告ではなくして、既存の“貧民窟探訪記”を検討し、今後の行なわれるべき“貧民調査”の“調査項目”を、統計研究者の立場から、提示するにとどまっていた⁽³⁾。このように、呉文聡は貧困調査研究の必要性和「調査項目」の提起にとどまったのであるが、高野岩三郎は貧困調査研究を最初に実施した研究者だったのである。

かくて、①この“EAST LONDON IN TOKYO”（1894（M27）/4下旬, 演習報告原稿）は、高野岩三郎の社会統計学者としての原点をなすばかりではなく、日本の社会科学史上における最初の“貧困問題実態調査報告”としても、記憶さるべき作品といえよう。②ただし、今後の検討を要する点としては、呉文聡における調査「計画項目」（「職業」・「食物」・「家賃」・「家具」・「出来事」・「慣習」・「場所」と、高野岩三郎の調査「実施項目」（「必需品の状態（衣・食・住）」・「仕事」・「心的状況」・「貧困の原因」）との異同がある。とりわけ呉文聡においては、まず最初の調査項目として「職業」があげられているのに対して、高野岩三郎においては「必需品の状態（衣・食・住）」が、最初にかかげられていることである。呉文聡は「職業」重視の立場を、高野岩三郎は「衣・食・住」（消費生活）重視の立場をとっていたと、考えられるのではなからうか。③また、高野に

(2) 大橋隆憲『日本の統計学』（1965, 法律文化社）pp.29-54。

(3) 呉文聡「東京府下貧民の状況」（『スタチスチック雑誌』1891（M24）/1/20, のち中川清編『明治東京下層生活誌』1994, 岩波文庫所収）。

においては、貧困の実態の記述にとどまらず、「貧困の原因」という項目が加わっている。またさらには、この報告の題名“EAST LONDON IN TOKYO”自体にも示されている如く、国際比較という観点が重視されている。これ等が形成期の日本社会統計学上の重要な前進であったことは言うまでもなからう。

(3) 調査対象の選定

つぎに、この調査においては、東京における“三大貧民窟”たる下谷万年町・四谷鮫ヶ橋・芝新網町を、調査対象として選定している。この調査対象の選定は、当時における“貧民窟探訪記”や東京市民の常識に照らして、当然のこととしての選択であったろう。この点については、後に再論する。

(4) 調査技法の選定

この調査報告においては、「幾回となく実地の調査・視察を試み」た (p.66) と記されているが、その具体的方法は、以下の四つの方法であった。通常の、資料収集・観察・聴取りという調査方法を、当面する問題に則して具体化したものといえよう。

- ①統計表の作成。調査方法の第一は、下谷・四ッ谷・芝の区役所の書類（戸籍簿、その他の公文書）による諸統計表（a.住宅戸数・人口及びその増減、b.出生及び死亡数、c.死亡者の年令と病名、d.判決が出された犯罪の数と犯罪の種類）の作成であった。これらの資料は、「私の報告 (paper) の第1次資料をなすもの」とされている。
- ②聴取り。つぎに「第二の情報源」としてあげられているのが、「学校長・貧民住居管理人との個人的会話」とされている“聴取り調査”である。これは、貧民長屋の管理人江口辰五郎氏（鮫ヶ橋）と鈴木熊次郎氏（新網町）、および浅野直八氏（鮫ヶ橋のクリスチャン・チャリティ・スクール主事）からの聴取り調査で、彼等を訪問し、友好的に会話し、その説明の要点を記録し、聴取り記録を作成している。
- ③観察。第三は「個人的観察」であった。この「観察」は、「最も重要な方法」と意識されているが、また「非常に困難」であり、「多くの時間を必要とする」方法で、「各地域について二度、簡単な観察を行なった」に止まったという。この点は、当時のジャーナリスト等による幾つかの“貧民窟探訪記”（前掲の中川清編『明治東京下層生活誌』所収および松原岩五郎『最暗黒の東京』等）に一步を譲るものであったといえようか。
- ④調査協力者提供資料。上記「個人的観察」を補っているのが、「帝国済民会」原十目吉氏提供資料であった。原氏は「東京の、貧民が住んでいる殆どあらゆる地域の500戸以上の家を訪問し、彼等の家庭事情を詳細に観察し、質問し記録し、ケースごとに、適当な救済策を示し、記録の収集と編集に当たり、救済計画を実行に移すことに努めていた」という。この原氏の協力を得られたことは、この調査に大きくプラスするものであったろう。

以上の、①諸統計表の作成、②聴取り、③観察、④調査協力者提供資料の利用、という調査手法によって、この調査は進められている。とりわけ、諸統計表の作成は、後年の社会統計学者たる高野岩三郎の原点となった調査方法ともいえようか。もっとも、明治期とはいえ、一学生が区役所の戸籍簿その他の公文書を直接利用し統計表を作成しえたことは、有力な紹介者があったのか、あるいは帝国大学の権威によるものか、あるいはまた高野岩三郎自身の社会調査者としての天性による

ものであったのであろうか。

むすび

この調査報告の末尾において、高野岩三郎は「わが国には、未だ貧困問題は存在しません」と断言している。これは、イースト・ロンドンと比較してのことではあろうが、この報告全体を流れるヒューマニスティックなトーンとは、異なるようにも思われる。「貧しい人々」が「富める者に対して敵意を抱き」「現存の社会秩序に対して不満を抱いている」のでなければ、社会問題としての「貧困問題」は存在しない、という理解であらうか。そして、「ヨーロッパの文明と産業システムが強力に流れ込み」「貧困問題」が発生するという事態に備えての、「貧民の状態についての科学的調査」と「適切な“救貧政策”」の考慮を、提唱してもいる。そしてまた、「貧民と如何に処すべきか」につき、「日本は西欧に、範を垂れることが出来るのです」と、この調査報告を結んでもいる。上り坂にあった明治中期の日本資本主義社会における、若き学徒の意気の発露であったともいえようか。

[補] 調査対象再論——明治中期東京の「三大貧民窟」

この高野岩三郎のゼミナール報告“EAST LONDON IN TOKYO”（1894/4）の対象となっており、また一般にも明治期の東京における三大貧民窟とされてきたのは、下谷の万年町・四谷の鮫ヶ橋・芝の新網町であった。今回この“EAST LONDON IN TOKYO”の訳出にあたり、その現地を確かめておきたいと思い、各種資料をもとに現在地を訪れてみることにした。しかしながら、既に110余年を経た今日、この作業は思いのほか難しいことであった。度重なる町名変更と区画整理、スラム・クリアランス、関東大震災と第2次大戦の戦禍、幹線道路建設等々が行われており、現行の地図・地名によって、その現在地を知ることは殆ど不可能に近かった。

そこで、一方において明治期の貧民窟探訪記を検討し、他方においては「現代地図と歴史地図とを重ね」て作成された新創社編『東京時代MAP（大江戸編）』（2005年、光村推古書院）によって江戸時代の地図と現在の地図とを重ね合わせ、さらには東京の地理に詳しいノンブル社野仁潤氏の御協力をえて『角川日本地名大辞典』や関連区役所・教育委員会の地域史記述・地名変更記録等を跡付けた上で、現地を訪れて三大貧民窟に対応する現在地を推定することとした。これらの検討結果を図示したのが、地図ABCである。これ等の地図・文献によって、明治中期における東京の三大貧民窟の位置と性格の概要を示せば、大略以下の如くである。

◇下谷万年町。地図上の現在地は、『東京時代MAP（大江戸編）』No.3および台東区役所区民部観光課『旧町名下町散歩：台東区』1990、pp.30, 31, 84, 85）による。①「昔このあたり一帯は葦が茂る沼地であった」が、徳川家康の江戸入り後、1616年に「この地を開いた黒鋤者くろくわものの拝領地」となった。「黒鋤者とは、戦国時代、軍備土工の役を勤め、江戸時代になってからは、江戸城の警備・工事・防火を職」とするようになった者達である。そして、この地（上野）は「東叡山の

地図A 下谷「万年町」「山伏町」



地図B 四谷「鮫ヶ橋」



地図C 芝「新網町」



注) 原地図の出典については、本文を参照されたい。
 なお、区画・町名等の貼込みは山本。

麓であったことから、山崎町と」呼ばれるようになった。②「上野公園の東のほとりステーションより四、五町北に当たり、昔より山崎町といえは何人も知らざることなき貧民の一窟あり、今これを万年町とはいふ」。③「上野の山を下れば、早くも眼下に顕われ来る一の画図的光景。それはあたかも蒸気客車の連結せるがごとき棟割の長屋にして、東西に長く、南北に短く斜に伸びて縦横に連なり……、これぞ府下十五区の内にて最多数の廢屋を集めたる例の貧民窟にして……」[松原岩五郎『最暗黒の東京』(1892, M25/11)『岩波文庫版』pp.18, 19]。④職業。a.「貧民といえども」「乞食渡世は不具もの、癡疾、老衰、幼弱の男女に限り、他は「手職」がある。b. 職業の「十の七、八は男は車夫・紙屑買い・紙屑拾いにて、女には硝子屑買い最も多し」といふ。人力「車夫」が多いのは上野駅<1883, M16開業>の存在と関係していよう。また「紙屑買い・紙屑拾い」は、上野から浅草にかけての無数の寺社の存在と関係していよう。長い間、再生和紙は「浅草紙」(主に落紙用)と呼ばれていた。c. その他の「職業の種類」は種々様々で、按摩、納豆売りを始めとし鼻緒職・櫛職・煙草行商・三味線弾き・傘直し・楊枝削り・七色節・皮職・煙草茎買い・古下駄買い・玩弄物師・人相見・煙草切り・ムキミ売・マッチ職・空樽買い・竿竹売り・灰買い・青物売り・附木職・飴売り・木片売り・粉挽き・富貴豆売り・虫売り・ほおずき売り・下駄の歯入等々の63種類が掲げられている[東京都台東区役所区民部編刊『旧町名下町散歩・台東区』1990年, p.30], [大我居士(桜田文吾)「貧天地饑寒窟探検記 抄」1890, M23/8), 中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫版所収 pp.38, 41]。

◇四谷鮫ヶ橋(地図は『東京時代MAP(大江戸編)』No.12, No.18)

①四ッ谷鮫ヶ橋の谷を流れていたのは「日宗寺境内にあった池を水源とする桜川」で、「谷の形はちょうどY字型の地形」をしていた。その流域が、「明治末頃」には北東から南西へ順に、台地の「寺町」・谷間の「谷町2丁目」・台地の「南寺町」・谷間の「谷町1丁目」となっていた。②1637年に「江戸城の外堀を掘った揚土で鮫河橋付近の湿地や葦沼を埋め立て」一部に伊賀者の「下忍」が住んでいた。また後に「江戸城拡張のため」「寺院を城外に移した」。「平時には警備に、戦時には墓地を防備に使用」するために、合計約20もの寺が、この地域の谷間の台地に「幕府の政策で移された」のであった。③そして、「寺院が多くなると門前町が繁盛し、墓参などで寺を訪れる人に物を乞う者や、坂道で車のあと押しを手伝う者（立坊）などが屯して、あれ寺に露をしのご、低地に小屋かけして住む者が出てきた。それらの人々が鮫ヶ橋谷町に定住したと考えられる」という。なお、「谷町一、二丁目、同南町辺に多くの貧者が破れ垢染みし衣服を纏い、あるいは日雇い仕事、煉瓦積み、土方業、人力、荷車挽き」に、妻は「泣く児を背に結び付けつつ夫を扶けて後押しなどせる窮状」ともいう [『国民新聞』M23/6 『明治東京下層生活誌』p.34]。④現在、「鮫ヶ橋」という地名は、四ッ谷の迎賓館脇の「みなみもと町公園」小鳥居内の『四谷鮫河橋地名発祥之地』なる石碑に、その地名を止めているのみである。しかしながら、東京都下貧民窟の第1とも称された四谷鮫ヶ橋の地形（谷間の旧上流一帯）と、「暗闇坂、あぶらげ坂、鉄砲坂、観音坂」の急な坂道が、往時を忍ばせている [新宿歴史博物館編刊『新修：新宿町名誌』（2010年、pp.87, 97, 99, 245, 246）、「四谷区全図（大正元年）」（東京都新宿区教育委員会「地図で見る新宿区の移り変わり——四谷編」）、東京都新宿区教育委員会編刊『新宿区教育百年史』（1976年）pp.246-7, 258参照]。

◇芝新網町（地図は『東京時代MAP（大江戸編）』No.20）[浜松町駅の南西・金杉橋の北東]。

①「東海道よりすれば旧江戸の入口にして芝浦の海浜近く」、「昔は芝浦と唱へた土地の一部で漁業の盛んなところであった。寛永3年（1626）ここから幕府に白魚を献上したので、同7年網干場として100間四方の地を賜り、同11年9月市街地となって新網町と称した」。②「幕末に近い頃から貧民階級が暮しよいので追々流れ込み、今の浪花節の先祖チョンガレ節、梅坊主の住吉踊など各種類の門付け芸人の住宅地」となる（芝区誌）、③「土方人足の他に門付け芸人のたぐいが多いたというのは、おそらく街道筋を放浪する人々の落ちつき場所となりうる位置にあった故で、こうした条件もこの町のスラム化の一因であったと思われる」。〔松原岩五郎『最暗黒の東京』（1892、『岩波文庫版』p.58）、港区郷土資料館編刊『増補：港区近代沿革図集』2009、pp.205, 206 [原資料は『東京府志料・東京地理沿革史・東京案内』]。〕

（やまもと・きよし 東京大学名誉教授）